ルドルフ・シュタイナー
「ベールイ観・ソロヴィヨフ観」

・ベールイについて
・シュタイナーのベールイ観・ソロヴィヨフ観

Beitraege（第89/90号）ベールイ特集より
・ヴァルター・クーグラー「本号について」
・ヴィクトール・B・フェジュージン
「アンドレイ・ベールイ、
ルドルフ・シュタイナーと共に歩んだ道と
人智学における生涯」

神秘学遊戯団

■シュタイナー
「ベールイ観・ソロヴィヨフ観」

・ベールイについて
・シュタイナーのベールイ観・ソロヴィヨフ観

Beitraege（第89/90号）ベールイ特集より
・ヴァルター・クーグラー「本号について」
・ヴィクトール・B・フェジュージン
「アンドレイ・ベールイ、
ルドルフ・シュタイナーと共に歩んだ道と
人智学における生涯」

アンドレイ・ベールイ（本名ボリス・ブガーエフ、1880–1934）は
ロシア象徴主義を代表する作家・詩人で、
『ペテルブルク』『銀の鳩』の作者として知られているが、
シュタイナーとの関係は、1912年の出会いからベールイの晩年まで続き、
その思想と創作に深く刻まれている。

また、ベールイは、シュタイナーについて
西洋・中欧の思想家とは質の異なる東欧の精神を体現した人物とし、
複数の講演・論考で繰り返し取り上げている
ウラジーミル・ソロヴィヨフ（1853–1900）とも深い関係にあり、
その晩年には、ソロヴィヨフの哲学とシュタイナーの人智学を
結びつけようとしたりもしている。

そのベールイに関しては、シュタイナー遺稿管理部アーカイブの
Beitraege（D89_90/1985年）において
人智学との関係における生涯や書簡がとりあげられているので、
それらの記事もとりあげながら、
シュタイナー、ベールイ、ソロヴィヨフとその関係について、
その概略をまとめておきたい。

まず、ベールイとシュタイナーとの関係について。

ベールイはソロヴィヨフらの影響を受けた象徴主義者として、
すでに神智学や神秘思想に関心を持っていたが、
1912年5月、ブリュッセルからケルンへ向かい、
シュタイナーの講演「キリストと20世紀」を聴いて決定的な衝撃を受ける。

ベールイはこの講義が「自分のために読まれたようだ」と感じ、
シュタイナーを「心に語りかける教師」と見なして弟子となり、
妻のアーシャ・ツルゲーネヴァとともにヨーロッパ各地の講演を追い、
1913年にはエソテリック・スクールに入門。
1912年から1916年にかけて約400回の講演を聴いたと自ら記している。

1914年から1916年にかけてスイスのドルナッハに滞在し、
第一ゲーテアヌムの建設に参加し、木彫作業や夜間警備を担当し、
シュタイナーの日常（講義、散歩、食事の買い物など）を間近で観察している。

この時期は「ドクトル」と呼んだシュタイナーとの濃密な師弟関係の頂点で、
その後、第一次世界大戦勃発後の1916年にはロシアへ戻るが、
アーシャはドルナッハに残り、シュタイナーの弟子として
ゲーテアヌムの彫刻・ガラス窓制作などに携わっている。

ベールイは、その後、1921–1923年にベルリン滞在中、
1923年に最後の対面を果たしていて、
ソヴィエト政権下で人智学が禁止された後も、地下で活動を続け、
死の直前までシュタイナーの教えに忠実だった。
その関係には協会内部の人間関係やベールイの気質による危機もあったが、
盲目的崇拝ではなく距離を保とうとする姿勢も見られたものの、
根本的な信頼関係は変わらず続き、
ソロヴィヨフのソフィア思想と
シュタイナーの人智学を結びつけようと試みている。

この関係は、『ペテルブルク』や『コーチク・レターエフ』といった作品に
さまざまな形で反映されている。

なお、ここでシュタイナーとベールイのソロヴィヨフ観について
その概略をまとめておきたい。

〔シュタイナーのソロヴィヨフ観〕

シュタイナーは、ソロヴィヨフを人智学の視点から、
「人智学を受け入れていない思想家の中
で最も進んだキリスト理解を持っていた」と位置づけている。

まず『民族魂の使命』第10講（GA 121/1910年では、
人智学を受け入れていない者の中で、
ソロヴィヨフのキリスト概念が最も進んでいるが、
理解はほんの始まりにすぎないとしている。

ソロヴィヨフは、神的本性と人間的本性が
抽象的統一ではなく有機的統一として現実に協働することを強調し、
キリスト存在には二つの意志の中心があるととらえているが、
それは第六文化期において、霊我が意識魂に流入し、
人間が「高次の本性が低次の本性を抑制する二重性」を
感じるようになることを予告する予言的な夜明けであり、
ロシアの民族魂が第六文化期の萌芽を
すでに哲学の形で先取りしている、と位置づけている。

『現代史における徴候から現実へ』第8講（GA 185/ 1918年），
第一次世界大戦末期の講演では、
ロシア民族は「キリストの民」である、
キリストが思考と感情を内側から浸透させる
内的オーラとして常に現前しているとし、
その最も純粋で美しい代表がソロヴィヨフであるとしている。
霊的なものを物質的・地上的権力に引き下ろす傾向である
イエズス会主義との対比で、
ソロヴィヨフには「物質を霊化しようとする衝動」がある
というのである。

1921年には、人智学系出版社「来るべき日（Kommende Tag）」が
ソロヴィヨフ『神人性についての十二講』をドイツ語訳した際、
シュタイナーは補足序文を書き、
さらに論考「東西の媒介者としてのソロヴィヨフ」を発表している。

そこでは、ソロヴィヨフを
「東の魂を保ちつつ西洋の思考形式で語る媒介者」と見なし、
「現代の哲学者であると同時に、古代的概念における賢者」であり、
東西の相互豊穣のために西洋にとって極めて重要な人物だが、
「その著作のすべてを知り得たわけではない」と留保をつけている。

〔ベールイのソロヴィヨフ観〕

ベールイとウラジーミル・ウソロヴィヨフの関係は、
単なる思想的影響にとどまらず、
モスクワのアルバート通りで、ウラジーミルの弟
ミハイル・セルゲーヴィチ・ソロヴィヨフ（歴史家・翻訳家）一家と
同じ建物に住んでいたり、
ミハイルの息子でウラジーミルの甥である
セルゲイ・ソロヴィヨフ（1885–1942、詩人）との友情関係もあり、
そうした家族的・友人な親密さと、
象徴派の「生そのものを芸術化する」実践が結びついて、
ウラジーミル本人との接触はごく限られていたものの、
ソロヴィヨフ家を通じてその思想を全身で受け取り、
若い象徴派の中で最もソロヴィヨフに近い理解者の一人となった。

ベールイがウラジーミルと直接会ったのは遅く、かつ短期間で、
主には1900年春、ミハイル宅での集まりにおいてで、
その際にニーチェの「超人」とソロヴィヨフの「神人性」が
どう関係するかについて短い会話を交わしているが、
その年の8月にウラジーミルは死去している。

1903年には、理解されなかった預言者として彼を悼み、
ミハイルに捧げた詩「ウラジーミル・ソロヴィヨフ」を書き、
若い象徴派の中で、ソフィオロジーとテウルギアを

最も深く自分の体系にしようとしたといわれている。

なお、ベールイは人智学にふれることで、
ソロヴィヨフの全一・ソフィア・神人性を、
「世界魂」「超個人的自我」など
人智学の語彙でつなごうとする試みを行っている。

以下、Beitraege（第89/90号）ベールイ特集から。

〔本号について（ヴァルター・クーグラー）〕

本号では、スイスのドルナッハにあるルドルフ・シュタイナー遺稿管理部アーカイブに保管されている、ロシアの詩人・小説家・哲学者アンドレイ・ベールイの書簡のすべてを、ここに初めて一般に公開いたします。

これらの手紙の中心となっているのは、ルドルフ・シュタイナーおよび人智学との関係です。ベールイが1928年に執筆し、1975年にスヴェトラーナ・ガイアーの翻訳によって『生の変容』（バーゼル・ツビンデン出版社刊）として出版されたシュタイナーへの回想録を通じて、すでにこのテーマに親しまれている読者の方々にとっても、本書はこれまで知られていなかった多くの新たな視点をもたらしてくれることでしょう。

同時に強調しておきたいのは、ベールイが（特にマリー・シュタイナー＝フォン・シーフェルスへの手紙の中で）自身の初期の著作や講演、今世紀のロシア文学において最も重要な小説作品の一つである『ペテルブルグ』、さらには象徴主義、キリスト教、そしてこれらに関連してシュタイナーの著書『自由の哲学』について述べている事柄のすべてが、哲学や文学の専門界にとっても、ベールイの作品とその人物像を紐解く上で極めて価値のある示唆を与えてくれるという点です。

すでにロシア語で何度も出版されているアレクサンドル・ブロークへの手紙を除き、これらはすべて初公開の書簡となります。

アレクサンドル・ブロークへの手紙の翻訳は、ベルリンのウルリヒ・ヴェルナーが担当しました。また、マリー・シュタイナー＝フォン・シーフェルスへの手紙（1912年5月6日ケルン発、および1916年1月13日ドルナッハ発）と、ミーシャへの手紙の翻訳は、フライブルクのヴェンツェル・ゲッテが手掛けました。

ロシアにおける人智学に関するアーカイブ保管資料の整理は、チューリヒのヴィクトール・B・フェジュージンが担当しました。彼はさらに、マリー・シュタイナー＝フォン・シーフェルスへの手紙（1913年、および1923年3月11日付）と宛先不明の手紙の翻訳も行っており、最終的にはすべての書簡、アースヤ・トゥルゲーニエフの文章、アンドレイ・ベールイのテキストに対する「註釈」の執筆、そしてベールイのテキストへの「短い手引き（解説）」も寄稿しています。本号の冒頭を飾るのも、フェジュージンの執筆による論文であり、ルドルフ・シュタイナーおよび人智学との関わりにおけるベールイの生涯の重要な足跡が描かれています。

ヴァルター・クーグラー

〔アンドレイ・ベールイ、
ルドルフ・シュタイナーと共に歩んだ道と
人智学における生涯〕（ヴィクトール・B・フェジュージン）

「そして『あなた』と『わたし』は、燃え尽きた夢
光の翼を持つ星々の輝きの中に溶けてゆく……
わたしたちは出会った —— 時と空間の彼方
涯（はて）なき遠方の、祝福された子供たちとして」
（ベールイ『人智学（アントロポゾフィー）へ』、1918年）

「人智学者でありながら、もし象徴主義者でないとするならば、すなわち、外部から与えられ　た素材と自らの内なる生命体験との結びつきを構築する能力がないとするならば、その人はただただ恐ろしい存在である」
（ベールイ『なぜ私は象徴主義者になったのか……』、1928年）

アンドレイ・ベールイという存在の中には、哲学者、科学者、詩人、人智学者、数学者、神秘主義者、そして小説家が統合されていました。そのユニークな姿は、彼の芸術的な道のりの初期においてさえ、同時代の人々に多くの謎を投げかけ、一方で志を同じくする人々からは、賛嘆、熱狂、そして誇りさえも呼び起こしました。

ベールイの若い頃の友人であり、象徴主義のサークルにおける仲間であったエリス＝コブリンスキーは、かつて彼を次のように評しています。

「抒情詩人として、哲学者として、神秘主義者としてのアンドレイ・ベールイとは何者なのか？……答えは存在します。そしてその答えは、アンドレイ・ベールイという生き生きとした人格そのものです。彼は彼自身のあらゆる象徴における『最後の象徴』であり、彼のあらゆる理論における『最初にして最後の命題』であり、彼のあらゆる現象における『最後のモチーフであり最後のメロディ、最後の神秘的な容貌』なのです。ベールイはひとつの暗示であり、記号であり、前兆なのです！……彼は、将来現れるべき『新しい人類』の最初の先駆者なのです」
（エリス著『ロシアの象徴主義者たち』モスクワ、1910年）。

生涯を通じて、アンドレイ・ベールイは同時代の人々を魅了し続けました。彼は自覚することなく、人々をまるで魔法のように惹きつけました。ロシアの高名な哲学者ニコライ・ベルジャーエフ（1874〜1948）は、ベールイを「極めて才能豊かな人物であり、時には天才のきらめきが感じられた」と評しています。

また、別のロシアの哲学者フョードル・ステプン（1884〜1965）は、ベールイの特異性と、彼がこの世の住人ではないかのような独特の雰囲気をこう強調しました。「私がこれまでの人生で出会ったあらゆる人々の中で、ベールイは最も風変わりな人物だった。彼の特異さは時に驚くほど強烈で、私たちは皆彼と同じ意味において『人間』と呼べるのだろうか、という、およそ不可能な問いさえ私の頭をよぎったほどである」

ベールイの身近にいた人々は、たとえ彼の信念や芸術観を共有していない者であっても、一つの点で意見が一致していました。それは、個人としてのベールイが「特別で非凡な存在」であったということです。彼の人格と個性は、最も親しい友人たちでさえ、容易には理解できませんでした。アレクサンドル・ブローク（1880〜1921）は、自身が亡くなる1年前、ベールイについて次のような言葉を残していますが、ベールイを知る者は誰もがこの言葉に同意しました。「彼は相変わらずだ。天才的で、そして奇妙である」

アンドレイ・ベールイは、その生涯が特異で風変わりであったのと同様に、書く文章もまた独特で奇妙なものでした。彼の造語や文体、そして理論的著作のテーマは、当時も今もなお、主に知的エリートのための読物であり続けています。言語の刷新という点において、象徴主義者であるベールイは、多くのロシア・未来派やアクメイズムの詩人らを凌駕していました。彼は、独自の構文と無数のネオロジズム（新造語）に満ち

た、彼独自の「ベールイ語」を作り出したのです。ボリス・パステルナーク（1890〜1960）がベールイを「ロシアのジョイス」と呼び、マルセル・プルーストよりも高く評価したのには、それなりの理由があります。彼の作品は翻訳が極めて困難であるため、当時の多くのロシアの詩人たちと同様に、ドイツや広く西欧の読者にはほとんど知られていません。現代のソビエト・ロシアにおいて、彼は「ブルジョワ的・観念論的哲学の代表者」というレッテルを貼られており、彼の詩や主著である小説『ペテルブルグ』が再出版されることは稀で、部数もごくわずかでした。

※訳註：〔アクメイズム：（ロシア語: Акмеизм）。20世紀初頭（1910年〜1912年頃）のロシア帝国で興ったモダニズム文学（詩）の流派。語源はギリシャ語で「最高点」や「頂点」を意味する「アクメ（akme）」に由来する。〕

ルドルフ・シュタイナーとの出会い、そして精神科学（人智学）の研究は、この詩人の私生活だけでなく、その芸術的創作にとっても決定的な原動力となりました。ベールイの約30年に及ぶ創作活動は、常に人智学の印のもとにありました。今日のロシアにおいて、彼は若いインテリ層の間で思想家・作家として「再評価」を迎えています。若いロシアの知識人たちは、ベールイの生涯や芸術に触れることを通じて、ルドルフ・シュタイナーとその生涯の業績である人智学へと行き着くのです。

アンドレイ・ベールイ自身は、自分の人生を7年ごとの周期に区切っています。これらの各周期は、彼の精神的発展の特定の段階と一致していました。この作家は、1880年10月27日（新暦）、モスクワに生まれました。本名はボリス・ニコラエヴィチ・ブガーエフ（アンドレイ・ベールイはペンネーム）です。父親のニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ブガーエフは数学者であり、モスクワ大学の理学部長でもありました。一方、ベールイの母親は、人格において父親とは正反対の人物でした。彼女には論理的・科学的な思考様式は縁遠く、音楽を愛し、ピアノを非常に上手に弾きました。同時代の人々は、彼女を非常に美しく、また非常に衝動的な女性であったと描写しています。そのため、幼い「ボリャ（ボリスの愛称）」の幼少期は、完全に「数学」と「音楽」の対極の印のもとにあったと伝えられています。さらに、この最初の「おとぎ話のような」7年間の周期は、両親の絶え間ない不和によって常に暗い影が落とされていました。この不和は、感受性の強い幼い子供の魂に、恐ろしい悪夢として映し出されたのです。後年、それらの幼少期の記憶や、意識の目覚めに関する個々の瞬間的な情景は、自伝的小説『コチク・レターエフ』の中で表現されることになります。この小説は、同時に、彼が人智学の思想世界で得た体験を芸術的に反映させた作品でもあるのです。

ベールイにとって特に重要だったのは、哲学者W・I・ソロヴィヨフの弟であるミハイル・ソロヴィヨフの家族と知り合った1895年でした。当時、この芸術家の創造的な力が最初の形をとり始めました。

「自分自身の中にある『芸術家としての資質』を発見するためには、ボトルにコルク抜きが必要なように、魂を開いてくれる特別な教養・環境が必要です。私にとってそのような、成長を促すコルク抜きとなったのがソロヴィヨフ家であり、1895年以来、私がその中で呼吸し始めた芸術の特別なカルチャーでした。ここでは一方で、シラー、シェイクスピア、プーシキン、チュッチェフ、フェート、ジューコフスキーなどの優れた手本による趣味の育成が行われました。その一方で、ヴェルレーヌ、メーテルランク、印象派、ラファエル前派、ラスキンなどの、趣味における大胆さと偏見のなさがここにはありました。そして最終的に私は、詩や散文で自分を表現することは『恥ずべきこと』ではなく、極めて自然なことなのだという意識をここで得たのです」

まさに彼の人生における第3の7年周期にあたる、ソロヴィヨフ家に「迎え入れられた」時期である1902年に、この詩人の文学的な誕生が果たされました。最初の作品である『交響曲第2番（劇的）』が出版されたのです。

思想家、詩人、そして小説家としてのアンドレイ・ベールイの発展は、多層的であり、決して直線的なものではなく、しばしば矛盾に満ちていました。彼の成長プロセスの包括的な描写をここに記すことはできません。それはこのような導入の枠組みを超えてしまうからです。しかし、以下では、その「自己を認識する魂」が形成されるに至ったいくつかの本質的な源泉について言及しておきます。

詩人が自分自身の中に「神秘的象徴主義」を発見することを可能にした『交響曲第2番』の発表後、彼はその後の著作の中で、これを独立した理論的・哲学的・「世界を認識する」教えへと発展させていきました。このために彼は、カント、ソロヴィヨフ、ニーチェ、ショーペンハウアー、そして新カント派の哲学を利用し、さらには仏教的な観点をも取り入れました。単なる審美的な傾向としての象徴主義では、ベールイを満足させることはできませんでした。彼にとって象徴主義とは、創造的な現実であり、世界を認識する行為そのものでした。というのも、彼は「象徴」を、人間の魂における精神（霊）のリアルな写し絵として体験していたからです。それゆえ、精神の外側で、あるいは精神的な体験なしに人生を生きること自体、彼には想像もつかないことでした。

この精神性（霊性）への探求は、ベールイをH・P・ブラヴァツキーの著作『インドの原始林から』へと導きました。これにより、彼の中に神智学への熱狂的な関心が高まりました。1902年、彼は「極めて聡明で教養のある、哲学博士の女性」である神智学者のゴンチャローヴァに出会います。ゴンチャローヴァはモスクワに最初の神智学サークルを設立し、ベールイもそこに積極的に参加しました。

ベールイの精神的な探求において、彼が孤独であった時間は長くありませんでした。世紀の変わり目（19世紀末から20世紀初頭）にかけて、ロシアのさまざまな文学・哲学サークルの間で、神智学への活発な関心が生じていたのです。そして1908年には、1875年にH・P・ブラヴァツキーによって創設された世界神智学協会の支部として、ロシア神智学協会が正式に設立されました。

ベールイ自身、当時を回想して次のように述べています。

「第2の7年周期の終わりには、カント、リッケルト、コーヘンに退屈していました。1908年の秋からは、再び人目を忍んでベサント、ミード、リードビーターを読み、神智学者のサークルに通うようになりました。私はブラヴァツキーの『シークレット・ドクトリン（秘密教義）』を贈られ、……ミンツロヴァと極めて緊密な接触を持つようになったのです」

最後に言及した人物（アンナ・ミンツロヴァ）については、ここで少し詳しく触れておく必要があります。というのも、彼女はベールイのその後の人生に少なからぬ影響を与え、彼を内面的にルドルフ・シュタイナーとの出会いへと「準備」させた張本人と言われているからです。

ベールイはすでに1904年の時点で、作家が精神的な道を歩むには、賢者、長老、霊的な父、あるいは指導者が必要であることを認識していました。「芸術家は……指導者にはなれない。あなたには別の指導者が必要だ」（『アラベスク』1904年）。そしてベールイは、ミンツロヴァを通じてそのような師を見出せるだろうと感じていました。ミンツロヴァは自らを「薔薇十字団の使者」と称していました。彼女は、名前を決して明かさない自身の師たちから、ある特定の使命を帯びてロシアへ派遣されていたのです。その使命とは、ロシアの上空で濃密になりつつあった「闇の勢力」を払いのけることのできる、精神的な同胞団を立ち上げることでした。ミンツロヴァ自身の言葉によれば、彼女は選ばれた者たちと、しかるべき瞬間にこの親密なサークルに現れるはずの「師たち」との間の、単なる仲介者にすぎませんでした。

ミンツロヴァは霊視能力と深いオカルトの知識を兼ね備えていました。彼女がベールイに授けた瞑想と教えは、ベールイの小説『銀の鳩』の芸術的造形に確かな影響を与えました。しかし、ベールイとの最後の面

会の際、ミンツロヴァは「自分は使命を果たせなかったため、永遠に姿を消さなければならない」ということをほのめかしました。そして実際に、ミンツロヴァは間もなく姿を消しました。それは1910年のことです。それ以来、彼女の姿を見た者は誰もいません。しかし、彼女は去る前に、1912年に訪れるであろう重要な出会いのための「目印」として、ベールイに指輪と、福音書からの引用が記された一冊の手帳を渡していたのです。

1911年、志を同じくする友人エリス＝コブリンスキーが、モスクワの象徴主義系出版社「ムサゲト」において、ルドルフ・シュタイナーの著作を研究するサークルを組織しました。メンバーの何人かがシュタイナーと個人的な知り合いであったこのサークルの活動に、ベールイは精力的に参加しました。そしてこのサークルの中で、この作家は、かつてミンツロヴァから受けた授業や指示が、実はシュタイナーの講義や瞑想の一部であったことに気づいたのです。

こうして、ルドルフ・シュタイナーとの出会いは内面的に完全に準備されました。ベールイは後年、このつながりについて次のように語っています。

「1901年から1911年にかけて、私はシュタイナーの認識論の用語で考えていたわけではありませんでした。しかし、私の認識論の用語は、文面上は独特なものに見えたにせよ、認識と創作に対して、シュタイナーが示したのと同じ方向への出口を示していたのです」

こうして、内面の生における様々な出来事が重なり、1912年にケルンでのルドルフ・シュタイナーとの運命的な出会いへと彼を導きました。この出会いの後、ベールイはシュタイナーの「事業」に加わりました。続く4年間は、彼自身の言葉を借りれば、完全にシュタイナーと人智学の印の中にありました。作家自身は、自らの精神的な道のりにおける内なる論理を次のように捉えています。

「私にとって『象徴主義』から人智学への道は、すでに『象徴論』で描いていた道の結末として生じたものでした。そして、内的な仕事の方法の方向性についてシュタイナーが私に与えてくれた素晴らしい指示や、その仕事を土台として常に相互に交流できる可能性があったことで、私は極めて自然な形でシュタイナーの個人弟子の集まりへと迎え入れられたのです。人智学協会への入会は、すでに内面で長らく成熟していた事実を、外面的な形にしたにすぎません。1907年の時点で、自身の論文『ニーチェ』を神智学者のアニー・ベサントによる『より高次の約束』の引用で締めくくり、その後の5年間、これらのテーマに関する文学を真剣に考え、読み込んできた人間が、1912年にルドルフ・シュタイナーの周囲に集まった人々の列に加わったのは当然のことであり、この道に一切の迷いはありませんでした」

この個人的な出会い以降、「シュタイナー博士はアンドレイ・ベールイの最も優れた部分」となりました（1913年2月18日/3月3日付、アレクサンドル・ブロークへの手紙）。この時期、ベールイは自身の最も重要な小説である『ペテルブルグ』を完成させますが、この作品は、ルドルフ・シュタイナーとの出会いとワークの結果である彼自身の内面的な体験を、多くの点で芸術的に反映しています。

1912年の後半と翌年の前半は、完全に人智学の仕事に捧げられました。彼はシュタイナーの講演を聴講し、当時は書籍ではなく原稿印刷の形でのみ入手可能だった、シュタイナーが過去に行った連続講演録を研究し、瞑想に励み、シュタイナーの側近の弟子たちのサークルに入り、その実践指示に従い、自分のワークの成果を口頭や書面で師に報告しました。1914年からは、ドルナッハにおける最初のゲーテアヌムの建設にも参加しました。ベールイの人智学的ワークの芸術的な結実は、この時期（1912〜1916年）の詩、小説『コチク・レターエフ』、そして理論的著作『現代の世界観におけるルドルフ・シュタイナーとゲーテ』の中に表現されています。

しかし、この集中的な活動と、魂および精神の過度な緊張は、この作家の繊細で傷つきやすい性質に影響を与えずにはおきませんでした。こうして徐々に内なる危機が兆し始め、ベールイと彼を取り巻く人智学的な環境（周囲の会員たち）との間の、いくつかの激しい衝突においてそのピークを迎えました。後年、彼は当時の状況を著書『なぜ私は象徴主義者になったのか……』の中で、次のような言葉で回想しています。

「こうして、30年に及ぶ私の複雑な人生を携えた私は、実際、人智学協会の平均的なレベルの人々からは理解されずに埋没してしまっていました。1913年や1914年には、私は本気で、もう『自分は存在しない』のではないかとさえ思っていました。私の『自我』の個人的なバリエーションのすべては、私に嵌められた『一般的な枠組み』によって片付けられてしまっていたのです。しかしその一方で、囚われとなった者の上には、表現の手段を縛られた、醜くも寡黙な、個としての『自我』が、鷲の翼に乗って湧き上がっていました。これほどの認識の隆起、これほどの高空飛行を、私はこれまでの人生で一度も経験したことがありません。そして、この『高空飛行』が、人々を飛び越えて、私の師であるルドルフ・シュタイナーのもとへと私を運んでくれたのです。私は4年間の精神的な関わりの中で、彼から測り知れないほど多くのものを受け取りました。シュタイナーが、聴衆の平均的なレベルと同じように私に接しなかったのは言うまでもありません。人は問うでしょう。『なぜ彼は人智学協会の中で、私（により適した居場所を見つけてくれなかったのか』と。この事実を説明するためには、人智学協会に対するシュタイナーの、複雑で理解しがたく、パラドックスに満ちた関係についての論文を一本書き上げなければならないほどです。実際のところ、彼は人智学協会の会員でさえなかったのですから」

1916年、ベールイは軍への徴兵にともない、ロシアへ帰国せざるを得なくなりました。現地に戻った彼は、それまで自身の中に吸収してきた人智学の内容からいまだ強い感銘を受けたままで、休むことなく新たなプロジェクトに取り組み続けました。

1917年、彼は言語の響きに関する長編詩『グロッソラリア（Glossolalija）』を執筆しましたが、この作品には言語に関するルドルフ・シュタイナーの講演から得たインスピレーションが取り入れられていました。ちなみにベールイは、自分が1915年以降に執筆したすべての作品は、シュタイナーの身近に滞在していた1912年から1915年までのあの数年間の体験と経験からインスピレーションを得たものである、と何度も強調しています。

ロシアにおいて、彼は現地の人智学協会の活動に精力的に参加するようになりました。シュタイナーの連続講演録を朗読し、自身も講師として壇上に立ち、さらにはシュタイナーの『神秘劇』の上演準備を進めました。彼は作家として広く知られ、高く評価されていたため、特に自身が深く関わった「プロレトクルト」での講演や、彼自身が創設した「ヴォルフィラを通じて、広範な一般大衆に対して人智学志向の精神科学（霊学）を広く周知させることに成功したのです。

※原註〔プロレトクルト（Proletkult）：プロレタリア文化。ロシア革命後のロシアにおける文化機関であり、一般の民衆に新しい文化的衝動を広く伝えることを任務としていた。〕
※原註〔ヴォルフィラ（Volfila）：自由哲学協会。〕

海外滞在の最後の数ヶ月間、ベールイの関心は特に「平和」「ドイツ」「世界大戦」といったテーマにありましたが、帰国後は人智学からインスピレーションを受け、「新しい社会的文化」「ロシア」そして「革命」という問題に取り組む必要性を感じるようになりました。特に彼は、人々にルドルフ・シュタイナーの真の人物像とその教えを広く伝えることこそが、自らの社会的な使命であると考えていました。

同じ時期に、彼は一連の理論的著作を執筆し、これらを『危機（Krisen）』と名付けました。そのうちの一編『思考の危機』はドイツ語にも翻訳されています。

革命直後の過酷で新しい環境のもと、ロシアの人智学者たちは、新しい活動スタイルを構築するという課題に直面していました。革命による社会の激変の影響を受け、同時に西欧の人智学協会のあり方に失望していたベールイは、「共同体」や「協会」のワークスタイルとして、新しい独自のスタイルを創り出そうと試みたのです。この作家は、人智学のワークをロシアの文化全般に及ぶ規模で展開することを目指しました。そして、短い期間ではありましたが、彼はそれを実現することに成功したのです。

彼が創設した「自由哲学協会（ヴォルフィラ）」の活動はロシア全土に広がりました。わずか2年の間に300回以上の公開集会や講演会が開催され、様々な階層の民衆を惹きつけたのです。作家のこの人生の周期においては、ベールイが人智学をどのような形で受け入れようとしていたかが鮮明に現れていました。すなわち、彼が人智学の中に何よりも見ていたのは、「生きた人間性」と「人間的な心の温もりのある衝動」だったのです。生き生きとした人間同士の関わりを欠いた人智学など、彼にとっては考えられず、到底受け入れられないものでした。彼が「生きたドルナハ」の精神を見出すことのできた、そのような人間的な共同体を、彼はミハイル・ロモノーソフの名を冠した人智学協会モスクワ支部の中に見出していました。

しかし、ベールイが活動を強いられていた戦時共産主義という恐るべき革命下の状況、さらにはシュタイナーから人為的に引き離されているという疎外感、そして私生活の不安定さが重なり、彼はロシアを離れてベルリンへ移住することを決意します。

ベルリンでの生活は、この作家にとってまさに「地獄」へと一変しました。妻アースヤ・トゥルゲーニエフとの決定的な破局によって私生活は「粉々に打ち砕かれ」、人智学協会との間で彼が望んでいたような交流は実現せず、ロシアからの亡命者たちはベールイという「変わり者」を敬遠しました。これらすべてが彼の中に深い内なる危機を引き起こし、それはルドルフ・シュタイナーに対する攻撃的な言動となって表れることさえありました。ベールイは後に、ベルリン時代について、「1916年の瞑想の日々から、1922年のワインとビールの日々へ」と書き残しています。

しかし1923年、ルドルフ・シュタイナーとの新たな個人的な再会が果たされます。シュタイナーはベールイに対し、「かつて不可解に思えたことのすべてを説明」し、ベールイがこの先の人生を発展させていく上で不可欠となる、極めて重要な助言を与えたのです。

同じ年の1923年、ベールイはロシアへと帰国しました。彼のその後の全創作活動が証明しているように、彼はその生涯の終わりに至るまで、ルドルフ・シュタイナーおよびその思想世界との強固な結びつきをその内に抱き続けていました。このことが最も鮮明に表れているのが、1928年に執筆され、1975年にバーゼルで出版されたシュタイナーへの回想録『生の変容』であり、また彼の根源的な著作である『自己を認識する魂の形成史（1924〜1926年）』です。

1934年1月のある静かな日に、アンドレイ・ベールイは亡くなりました。彼は後世に対して、単に「その創造的な幻想の涯なき広がり」や、「その構想力豊かなイマジネーションの底知れなさ」（F・ステプンによる評）以上のものを遺しました。ベールイは、20世紀における精神史の重要な一幕を自ら生き、そして同時に創り出したのです。